

# 大学生の恋愛観に対する批判的検討

## —恋愛関係とコミュニケーションに関するアンケート調査の結果から—

キーワード：大学生，若者，恋愛，コミュニケーション

人間共生システム専攻共生社会学コース

高木 一也

### 問題と目的

多くの先人たちにとって、愛や愛情というものは非常に魅力的なものであっただろう。その中でも、人と人との恋愛については多くの文学作品や詩、歌などが盛んに生み出されており、それは我々の現代社会にとっても同様である。また、井上俊（1973）が指摘したように、戦後日本社会において恋愛は結婚という制度との結びつきを強めるなかで、現代では家族を形成する上でも重要なものだと認識されることになっていく。このように、恋愛は現代社会をとらえる上でも、無視できない事象といえるだろう。しかしながら、国内において、恋愛を主な研究対象として取り扱う社会学的研究はそれほど多くない。谷本奈穂（2008）は恋愛に関する先行研究の「内容的」な傾向として、「恋愛そのもの」にアプローチするというより、恋愛を通して少子化やジェンダーの不均衡のような「硬派な問題」にアプローチする傾向があることを指摘している。いわゆる社会問題と言われるような事象へのアプローチの起点としてばかり恋愛が語られ、「恋愛そのもの」の語りが後退している現状があるならば、個々人にとっての恋愛や恋愛関係については十分に議論されていない可能性がある。また、社会における「問題」の部分ばかりが強調されることによって、恋愛や恋愛関係がもつ多様な側面を見落とされているとも考えられる。しかし、谷本（2008）の行ったような、雑誌の言説分析は、スマートフォンやSNSなどが普及した現代においては「恋愛そのもの」を描き出すには不十分な点があるように思われる。情報化・多様化・個人化の進む現代社会においては、マスメディアなどで取り扱われる恋愛のイメージをそのまま個人の恋愛観と結びつけることは難しい。そこで、本研究では、文献や大学生を対象とした聞き取りやアンケート調査を通して、現代社会における恋愛という事象の一端を描き出していきたい。また、そのなかで、「恋愛離れ」という言葉で語られるような、若者たちの「問題」について「恋愛そのもの」の視点から考察していく。

### 方法

本研究では主に、先行研究の整理と大学生を対象とした聞き取り調査やアンケート調査を行う。それらで得られた知見や分析をもとに現代社会における恋愛という事象について考察を行うとともに大学生のコミュニケーションや「恋愛離れ」という事象についての考察を行う。

聞き取り調査は、九州大学に所属する大学4年生（2014年当時）男女7名（男性5名、女性2名）を対象とし、2014年11月19日～12月13日の期間に、個人を対象とする質問紙を用いた半構造化インタビュー形式で行った。時間は1人あたり60分～90分程度で行った。調査対象者には事前に内容確認の上、録音、研究への利用の同意を得ている。

アンケート調査は、現代における恋愛や恋愛における排他性、コミュニケーションのあり方を明らかにすることを目的として行った。調査は、2016年11月22日～12月13日の期間に九州大学の学部2年生以上を対象として行った。調査対象は、筆者の所属するゼミや学部生との協議の上、受講者の属性や受講者数に注目し、学部2年生以上の学生向けに開講されている2つの講義の受講者とした。調査票の配付は、講義終了10分前に筆者が調査に関する説明を行った後に行い、回収は配付から一週間後の講義終了時に行った。調査内容、配付および回収の手順については、事前に講義担当者と打ち合わせを行い、承諾を得ている。調査票は調査に関する説明事項を記載した用紙と調査票をひとつの封筒に入れ、回収時には同封筒に調査票を入れた状態で提出してもらった。配付した調査票は159票、有効回収数は72票、有効回収率は45.3%（小数第2位で四捨五入）だった。

### 結果

#### ①先行研究の整理と聞き取り調査

先行研究の整理では、はじめに、現代の若者たちが恋愛に対してどのような意識を持つのかということ統計データと恋愛結婚についての先行研究の整理から確認した。統計データからは、結婚のスタイルとして恋愛結婚が増

加している一方で、恋愛交際を望まない若者が増えていることが確認された。また、恋愛結婚やロマンティック・ラブ・イデオロギーは歴史的に形成されてきものであり、日本においては戦後から 1970 年代にかけて恋愛結婚の増加が見られ、その背景に高度経済成長といった経済的な要因、社会的な秩序の要請とそれをプロパガンダ的役割で支えた各種メディアの存在、結婚の個人化などの社会的・文化的な変動があったことが確認された。日本において、近代的恋愛が矛盾をはらみつつも一時的な流行にとどまることなく社会的な価値観を形成したことは、近代的恋愛のイデオロギーが恋愛の本質的な部分を体現していたからではなく、社会的要因によって一時的にそれが「妥当」で「美しい」ものとして認識するようになったからではないか。また、現代的恋愛においても、近代的恋愛のように何らかの社会的要因が関係することは否定できない。しかし、ここで最も大切な指摘は、恋愛という事象がその内部に本質的な魅力を備えていることよりも、それがきわめて社会的・文化的なものであり、その時代の社会や個人が恋愛をどのようなものとして受容しようとしているかが、その時代における恋愛の姿を決定づけていることだろう。

次に、現代的恋愛のあり方について、谷本 (2008) の議論を中心に整理を行ったところ、現代的恋愛の特徴として、結婚や別れといった結末を先送りしながら、曖昧な恋愛をできるだけ長く楽しもうとする「恋愛の遊戯性」が確認された。また、このような現代的恋愛の特徴が再帰的近代化などの社会的要因との関わりをもつ可能性も指摘された。「遊び」としての恋愛が求められるならば、自身の人生において恋愛を重要視しない人々も当然増えるだろう。谷本 (2008) や谷本・渡邊 (2016) が提示するような結婚のために恋愛が必要だと考えるロマンティック・マリッジ・イデオロギーがある限りにおいて、恋愛は結婚にとっての必要な要素になるが、結婚を目的とするならば、結婚に見合った相手と恋愛すればよいのであり、恋愛そのものから得られる楽しさを求める必要はないだろう。

また、恋愛の排他性と浮気について、山田昌弘 (1992) の議論を中心に確認した。山田の議論からは、現代においては恋愛規範や排除規範といった規範が緩和され、恋愛の特殊性に揺らぎがみられることが確認された。排除規範や恋愛規範が弱まり恋愛に揺らぎが生まれているなかでは、恋人関係に恋愛感情があるかどうかを個々の恋愛観にもとづきながら確認していく作業が行われると考えられる。そこでは、社会的な規範ではなく、恋愛や恋人関係において行われる様々なコミュニケーシ

ンのあり方が重要になるだろう。恋愛が結婚との結びつきを維持していることから、社会制度や文化の影響が完全に排除されたとはいえないが、恋愛や恋人の特殊性は、相手が自分に対してどのようなコミュニケーションをとるかによって確認されるものになったのではないかと考える。

この点について、若者のコミュニケーションに関する従来の議論を確認したところ、そのような議論の多くが、主にコミュニケーションのあり方の変容 (多元化・同質化) に注目してきたことによって、関係内部や関係間の排他性について十分な議論が行われていなかったことが確認された。これは若者のコミュニケーションに関する議論が同心円モデルを前提とするような希薄化論への批判から始まったことが影響していると思われる。このような先行研究に対して、①恋愛関係が親密な一人の他者との選択的で不安定な関係であること、②恋愛関係が結婚の前提として強く意識されていること、③恋愛関係が選択的に結ばれた親密な関係における排他性のあり方に注目できることの 3 点から、恋愛関係に注目することが、排他性の議論を行う上で有用であると考えられる。また、恋愛関係や浮気について大学生へ聞き取り調査からは、多元的なコミュニケーションのなかで葛藤しつつ、排除を正当化する拠り所として恋愛関係内の約束を利用することが観察された。

## ②アンケート調査

はじめに、結婚観や恋愛観に関する調査項目から、先行研究と同様に恋愛という事象が結婚との結びつきを維持している傾向が本調査でも確認された。しかし、ここでの結びつきはロマンティック・ラブや山田昌弘 (1994, 2007) の近代的恋愛で想定されるような結婚によって恋愛が正当化されるという結びつきではなく、谷本 (2008) や谷本奈穂・渡邊大輔 (2016) が提示するような、恋愛が結婚関係において必要とされる、「ロマンティック・マリッジ・イデオロギー」として観察された。しかし、恋愛そのものについて注目するならば、恋人が欲しい理由として「将来、結婚したいから」をあげる人 (15 人) よりも「精神的な寂しさ」を理由にあげている人 (19 人) が多かったことから、現代の若者たちにとって結婚のために恋愛交際を行う必要性が意識される一方で、恋愛そのものから得られる精神的な満足が恋人関係に期待されていると考えられるだろう。谷本 (2008) では、現代的恋愛の特徴として恋愛関係という曖昧な関係をできるだけ長く楽しもうとすることをあげていたが、精神的な満足が恋人関係に期待されているならば、そのような満

足を得られる関係を求めて曖昧な関係性が回避される可能性は否定できない。

次に、友人に求めるものと恋人に求めるものについての回答では、友人においては「居心地のよさ」のような関係性そのもののよさが求められていたが、恋人においては「優しさ」や「誠実さ」のような個人の性格や能力が求められていた。「友人関係で大切だと思うこと」を尋ねた設問において、「困った時に助け合う」、「互いの意見を尊重すること」というような互恵的・相互行為儀礼的な関係を重要視する回答が多かったことから、友人関係では気づかずに満ちた優しい関係や多面的なコミュニケーションが行われる関係が築かれている様子が見られた。また、趣味や関心の共有が大切にする回答が多かったことから、友人関係において、同類性が求められているといえよう。友人とのコミュニケーションが関係重視の傾向にある一方で、恋人とのコミュニケーションでは相手の性格や能力を重視する傾向があった。また、「恋人関係で大切だと思うこと」として、友人関係においてはあまり大切に思う人の少なかった「価値観や思想の共有」や「隠し事をしないこと」といった項目で回答者が顕著に増えていた。また、友人関係では大切に思う人が多かった「趣味や関心を共有すること」への回答が少なくなっていたことから、恋人とのコミュニケーションにおいては、友人の延長ではなく友人関係とは異なる親密性のあり方として、相手の人間性の本質にせまる部分が求められているといえよう。このような意味において、恋人関係も他の親密な関係と同じく、多面的なコミュニケーションの一部として捉えられているとも考えられる。そのため、友人関係よりも恋人関係の方がより親密かつ重要な関係性として認識されているかについては注意が必要である。

さらに、友人と恋人とで求めるものに違いがあるかをケース分けによって分類したところ、よい関係そのものを友人にも恋人にも求めるといった関係一貫重視型や友人にも恋人にも個人の性格や能力を求める性格・能力一貫重視型、友人にはよい関係のあり方を求めつつも恋人には個人の性格や能力を求める関係一性格・能力重視型に分類される回答者が多かった（表1および表2）。

表1 各カテゴリーと分類される回答例

カテゴリー	回答例
A: 性格・能力重視	(友人に求めるもの) ・自分の意志をしっかりと持っている。ネガティブすぎない。礼儀はもっている。 ・安心感 (恋人に求めるもの)

	・誠実. 嘘をつかない. 浮気しない. ・包容力 ・お金, 常識, 価値観の一致, 経験
B: 関係重視	(友人に求めるもの) ・気軽に話し合える関係であること. ・居心地のよさ (恋人に求めるもの) ・一緒にいて落ちつく, 安心できること. 互いに素の自分で見られること. ・お互いが, 一緒にいて苦痛を少しも感じないこと.
C: 性格・能力および関係重視	(友人に求めるもの) ・話を聞いてくれる. 秘密を守る. 話が合う. 一緒にいて楽しい. ちゃんとしてくれる. 気づかってくれる. 明るい. ・互いの価値観を押しつけないこと. 何もしないでいることを許容できること. (恋人に求めるもの) ・安心感と楽しさ ・一緒にいると落ち着くこと. 一番自分のことを大切に思ってくれること.
D: その他	回答無し

表2 友人と恋人に求めるものについてのケース分け結果

友人-恋人	人数
A-A: 性格・能力一貫重視型	12
A-B: 性格・能力-関係重視型	1
A-C: 性格・能力-性格・能力および関係重視型	0
B-A: 関係-性格・能力重視型	13
B-B: 関係一貫重視型	15
B-C: 関係-性格・能力および関係重視型	6
C-A: 性格・能力および関係-性格・能力重視型	5
C-B: 性格・能力および関係-関係重視型	1
C-C: 性格・能力および関係一貫重視型	3
合計	56

このことから、Giddens (1992=1995) の指摘するような「純粋な関係性」が現代の恋愛において実現されようとしていると思われる一方で、親密な関係として友人と恋人の間には明確な境界が意識されておらず、個人にとって適合的な人間関係が「親密な関係」として大きく設定され、そこから異なるコミュニケーションのあり方によって友人と恋人とが位置づけられていると考えられる。これは、友人の恋愛観や恋愛交際状況があまりよくないものだと意識されていたとしても、個人の道徳心に反することや自己への影響が無い限りにおいて友人関係の関係性を変化させる人が少なかったことからも標榜されるだろう。

本研究では、先行研究などであまり言及されてこなかった浮気についても、現代における恋愛をとらえるため

の重要な要素として調査を行った。そこでは、現代の恋愛における浮気が、恋人関係の外部にいる人との間に親密なコミュニケーションがあるかによって認識されることが確認され、SEX やキスといった身体的なコミュニケーションであっても、それが個人の価値観にてらして恋人関係の親密性を疎外するようなものでないと判断されれば、関係性の内部において許容される可能性が示唆された。また、恋人関係や婚姻関係の外で行われる身体的コミュニケーションとしての浮気に関する考え方やそのような浮気をした人とのつきあい方についての回答結果では、浮気に厳格な姿勢をとりつつも、浮気を原因とする関係性の解消については慎重な考えが示されていた。このことから、恋愛の特殊性がゆらぐなかでも浮気に関しては厳格な規範が維持されている一方で、その規範が恋人関係を解消させるほどの影響力は持ちづらくなっていると考えられる。また、現代的な恋愛に二人自閉の状態があるとすれば、社会的な規範よりも互いの恋愛観や関係性内部で取り結ばれるルールのようなものによって関係性が維持されている可能性があるようにも思われる。

## 考察

以上の結果をふまえると、現代における恋愛という事象は、映画や小説にみられるような情熱的・破壊的な恋愛としてではなく、理性的に選択される親密なコミュニケーションによって特徴付けられると考えられる。情報化や個人化、自己の多元化が進行する現代社会においては、電話やメール、SNS などの通信手段が広く利用され、相手が見えない状態でのコミュニケーションや異質な他者とのコミュニケーションの機会が増加している。このような社会においては、多くの人間関係を使い分けるような多角的なコミュニケーションが行われており、特に現代社会を生きる若者たちにとってはそのようなコミュニケーションが友人関係のような親密な関係においても日常的なものになっている。しかし、親密な関係自体がもつ規範的な側面は依然として強く、とりわけ恋愛という事象においては限定的で閉鎖的な関係が志向される。そのため、恋人関係という特殊な関係を築くことは若者たちにとって精神的な満足感を与えると同時に、息苦しさを与えてしまうだろう。また、ロマンティック・ラブ・イデオロギーが衰退し、価値観が多様化し、親密な関係における恋愛の特殊性にも揺らぎが見られる現代社会では、性でも結婚でもない恋愛そのものの楽しさを求める欲求は脆弱にならざるを得ないだろう。そのような状況においては、恋愛そのものから得られる楽しさや快樂に

興味を抱かないならば、わざわざ恋愛の機会を多く持ちたいとは思う動機は少なくなり、そのような親密な関係を築きたいと思えるような相手が現れるまで、恋愛は保留される。このように考えるならば、若者の「恋愛離れ」は、現代的な恋愛のあり方そのものによって必然的に引き起こされる現象であると考えられるだろう。

最後に、本調査の限界としていくつかの点を指摘したい。今回の調査結果は対象を有意抽出によって選んでおり、回収方法の関係からサンプル数も少なくなってしまう。そのため、厳密に言えばここでの知見は今回の対象者の特徴を示すものであり、一般論へと適用するかについては慎重にならざるをえない。しかしながら、ここで得られた若者の恋愛やコミュニケーション、浮気に関する意見や考え方は若者自身によって語られたものであり、少なくとも現代社会における若者の恋愛の一端を表すものである。その意味において、今回の調査で得た知見は非常に示唆に富んだものであったと考える。また、今回の調査では、恋愛を操作的に定義することなく調査を行っている。そのため、筆者が考える恋愛と対象者たちの考える恋愛が完全に一致しているかには注意が必要である。この点は、次回以降の課題としたい。

## 主要引用文献

- Giddens, A., 1992, *The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love and Eroticism in Modern Societies*, Polity Press. (=1995, 松尾精文・松川昭子訳『親密性の変容——近代社会におけるセクシャリティ、愛情、エロティシズム』而立書房.)
- 井上俊, 1973, 『死にがいの喪失』筑摩書房.
- 谷本奈穂, 2008, 『恋愛の社会学——「遊び」とロマンティック・ラブの変容』青弓社.
- 谷本奈穂・渡邊大輔, 2016, 「ロマンティック・ラブ・イデオロギー再考」『理論と方法』31(1): 55-69.
- 辻大介, 1999, 「若者のコミュニケーションの変容と新しいメディア」橋元良明・船津衛編『シリーズ情報環境と社会心理 3 子供・青少年とコミュニケーション』北樹出版, 11-27.
- 山田昌弘, 1992, 「ゆらぐ恋愛はどこへいくのか——恋愛コミュニケーションの現在」アクロス編集室編『ポップ・コミュニケーション全書』PARCO 出版, 50-69.
- , 1994, 『近代家族のゆくえ——家族と愛情のパラドックス』新曜社.
- , 2007, 『少子社会日本——もうひとつの格差のゆくえ』岩波書店.